

# ら は た

TAHARA  
History Inquiry  
Club

## 歴史探訪

### クラブ 其の77

潮騒の伊良湖岬

〜柳田國男の逗留〜

柳田國男は、明治8年（1875年）、現在の兵庫県神崎郡福崎町に父松岡賢次（操）、母たけの六男として生まれました。生涯学問一筋に生き、日本民俗学の創始者として広く知られた人物です。松岡家の兄弟には、医学者の松岡鼎、歌人の井上通泰、言語学者の松岡静雄、日本画家の松岡映丘らがあり、皆それぞれの分野で活躍しています。明治33年（1900年）東京帝国大学法政科政治学科を卒業、その翌年には元飯田

藩士の柳田家の養子となり、以後柳田姓を名乗ることとなります。若かりしころの國男は、歌人松浦辰男に入門し、田山花袋や国木田独歩、島崎藤村らの文学仲間と広く交流しました。後に日本民俗学を樹立し、その発展につとめ、昭和26年（1951年）には文化勲章を受章。『遠野物語』（明治43年）『海上の道』（昭和36年）など多くの著作を残した柳田國男も昭和37年、87歳で亡くなりました。

柳田（松岡）國男が伊良湖へ来たのは、明治31年（1898年）の夏です。自然主義文学者として著名な田山花袋の「伊良湖半島」によれば、実際の滞在期間は7月12日から9月4日までとされています。この時國男は23歳、東京帝国大学の学生で、その逗留先は伊良湖の網元であった小久保惣三郎の離れでした。

柳田國男を伊良湖へ誘ったのは、地元、畠村（現在の福江町）出身の挿絵画家宮川春汀で、柳田をはじめ、花袋や独歩、藤村らとの交流がありました。春汀は、盛んに故郷渥美のことを彼らに話したと思われ、もしもこの人がいなくなったら、恐らくは柳田や花袋も伊良湖を訪れることはなかったものと考えられます。

柳田が滞在した当時の伊良湖集落



旧伊良湖集落中心地にある「柳田國男逗留の地」碑

は、現在の集落とは場所が異なり、半島の先端部、西ノ浜から伊良湖にかけて建設された陸軍伊良湖射場によって明治39年（1906年）に移転をする前の伊良湖集落に、夏の約2か月間滞在したのです。伊良湖ガーデンホテルの前庭辺りがちょうど小久保惣三郎宅で、現在その付近に「柳田國男逗留の地」碑が建てられています。この滞在中、同じ新体詩の仲間であった太田玉茗が、8月14日に伊良湖を訪れています。そして、玉茗が去った8月28日には、田山花袋が伊良湖を訪れ、9月4日、柳田と共に福江港から汽船に乗り、知多亀崎に向かっています。

柳田は、伊良湖滞在の4年後、明治35年に、この時のことを「伊勢の海」（後に「遊海島記」と改題）と題して雑誌『太陽』に発表します。この書こそ、今日の柳田民俗学の初

発とされています。

柳田國男といえば、島崎藤村の「椰子の実」作詩のきっかけをつくった人として有名ですが、自身も恋路ヶ浜に流れ寄った椰子の実をもとに、日本人が黒潮に乗って南から渡来したのではないかという壮大な仮説を『海上の道』で打ち立てています。

「遊海島記」は、柳田が伊良湖や渥美で見聞したさまざまな事柄を記録した滞在記です。本は図書館などにもありますし、渥美郷土資料館で販売中の『伊良湖と柳田國男』（柳田國男の著作のうち、伊良湖に関係した部分を抜粋してまとめたもの）の中にも所載されています。

最後に「遊海島記」冒頭の一説を紹介します。

伊勢の海の清き渚に遊び、類無き夕風夕月夜の風情を身に沁め、物悲しき千鳥の声に和して、遠き代の物語の中に辿り入らんとすれば、三河の伊良湖岬に増したる処は無かるべし。…『定本柳田國男集第2巻』より

歴史と文化の魅力あふれる伊良湖岬です。（天野）

〔参考文献〕

『渥美半島と文学 近代以後に飛来した作家たちを中心として』渥美半島郷土研究会 1997年

田原市博物館 22局1720